令和７年産「おいでまい」栽培のしおり

「おいでまい」の品種特性にあわせた栽培管理を行い、高品質・良食味米生産に努めましょう！
～目標：外観品質1等、タンパク質含有率6.5%以下～

ＪＡ香川県中讃営農センター（仲多度用）
香川県中讃農業改良普及センター 監修

病害虫の発生状況については最新の香川県病害虫防除所のホームページをご覧下さい。➡

各地区の水稲栽培のしおりがご覧になれます。➡

作業の目安

生育相：活着時期 ― 茎が増える時期 ― 茎の増加を抑える時期 ― 穂ができる時期 ― 穂が大きくなる時期 ― 穂に実が入る時期

基準＼作業	田植日（播種日）	間断灌水開始（田植 15 日後頃）	田干し開始	田干し終了（出穂３０日前頃）	穂肥Ⅰ施用（出穂 18 日前）	穂肥Ⅱ施用（出穂 10 日前）	出穂期	収穫期
管理の目安	6月20日（5月31日播種）	7月5日	7月20日	7月29日	8月10日	8月18日	8月28日	10月4日～8日
	6月25日（6月５日播種）	7月10日	7月23日	8月1日	8月12日	8月20日	8月30日	10月6日～11日
	6月30日（6月10日播種）	7月15日	7月25日	8月3日	8月14日	8月22日	9月1日	10月9日～14日

※播種、田植えは田植え適期マップに基づいて行いましょう。　※この作業の目安は、農業試験場での生育状態に基づいているので、地域の気象状況によって変動することがあります。

田植え時の状態

苗　丈	15cmまで
葉　齢	2.5 葉まで
株　間	18～22cm
植付本数	3～４本 / 株

田干し開始時の状態

草　丈	40cm 程度
茎　数	30 本 / 株
葉色板	4.5

干す程度は亀裂幅1cm以内

出穂 18 日前の状態（穂肥Ⅰ施用時）

草　丈	75ｃｍ
葉色板	4.0

出穂期の状態

葉色板	4.0

成熟期の状態

稈　長	77cm
穂　長	19cm
穂　数	22 本 / 株
葉色板	2.5

水管理：（活着後）湛水 → 浅水 → 間断灌水 → 田干し → 間　断　灌　水 → 湛水

育苗　基肥　育苗箱防除　田植え　雑草防除　確認防除　田干し開始　田干し終了　確認防除　穂肥Ⅰ（ワンショット以外）　畦畔管理　穂肥Ⅱ　必須防除（本田１回目）出穂期防除　必須防除（本田２回目）出穂 10～20 日後防除　落水（走り水）　収穫　乾燥　調製

栽培管理のポイント

健苗づくりに努める。（水稲育苗のしおりに準じる。）

基肥および土壌改良資材を施用する。

育苗箱処理剤を施用する。（必須防除）

株間は18～22cmを基準とする。

1株3～4本植えを基準とする。

（特にいもち病常発地）葉いもちに注意し、発生を確認したら早めに防除する。

（ガス湧きに注意）間断灌水を行い根ぐされの防止に努める。

初期除草剤散布後7日間は止水し、湛水を保つ。

小さなヒビ割れができるまでにとどめる。1株茎数20～30本程度で田干しを開始し、程度は田面の亀裂幅が1cm程度になったら走り水を行う。

※水稲の生育状況を確認して、施用量を加減する。出穂18日前（幼穂長5mm程度）に穂肥Ⅰを施用する。

コブノメイガや紋枯病の発生状況に注意する。

再開する。出穂30日前頃には田干しを終了し、間断灌水を

カメムシ類

紋枯病・穂いもち

ウンカ類

カメムシ類

10日前までに行う。カメムシ対策として畦畔等の草刈は出穂の

速効性肥料体系の場合、出穂10日前に穂肥Ⅱを施用する。

粒剤の場合は出穂20～15日前に散布する。（必須防除）

水和剤・粉剤の場合は出穂直前に散布する。

落水後も乾き過ぎる場合は走り水をする。

落水は収穫作業に支障のない限り遅らせる。

クサネムは収穫前までに抜き取る。

カメムシ類

粉の黄変率85～90%のときに収穫する。

収穫後は速やかに乾燥に移す。

仕上がり水分14.5～15.0%とする。

篩い目1.85mm以上のライスグレーダーで調製する。

「おいでまい」の施肥基準（側条施肥）

施肥量に注意して高品質・良食味な「おいでまい」を生産しましょう！

ほ場毎の栽培履歴や地力等に応じて施肥量を増減しましょう。

速効性肥料の場合　(kg/10a)

肥料名	合計	基肥	穂肥Ⅰ（出穂18日前）	穂肥Ⅱ（出穂10日前）	窒素成分
硫加燐安402	55	25	20	10	7.7
選択 ユーキ鉄ケイカル 成分%（Ca：34、Si：23他）	100	○土壌の酸度矯正、地力維持・改善のため、荒起しの時に施用する。			
選択 苦土一番 成分%（Si：20、Mg：12他）	40	○基肥、追肥（出穂 30～40 日前）いずれの施用でも良い。			
選択 けい酸加里 成分%（Si：34、k：20他）	40				

※側条施肥でない手散布等の場合は、基肥量を２割程度増肥する。

ツーショット肥料の場合　(kg/10a)

肥料名	合計	基肥	穂肥Ⅰ（出穂18日前）	窒素成分
スーパーブレンドLP40	55	25	30	7.7
選択 ユーキ鉄ケイカル 成分%（Ca：34、Si：23他）	100	○土壌の酸度矯正、地力維持・改善のため、荒起しの時に施用する。		
選択 苦土一番 成分%（Si：20、Mg：12他）	40	○基肥、追肥（出穂 30～40 日前）いずれの施用でも良い。		
選択 けい酸加里 成分%（Si：34、k：20他）	40			

※側条施肥でない手散布等の場合は、基肥量を２割程度増肥する。

ワンショット肥料の場合　(kg/10a)

肥料名	合計	基肥	窒素成分
おいでまい一発	40	40	7.2
選択 ユーキ鉄ケイカル 成分%（Ca：34、Si：23他）	100	○土壌の酸度矯正、地力維持・改善のため、荒起しの時に施用する。	
選択 苦土一番 成分%（Si：20、Mg：12他）	40	○基肥、追肥（出穂 30～ 40 日前）いずれの施用でも良い。	
選択 けい酸加里 成分%（Si：34、k：20他）	40		

※側条施肥でない手散布等の場合は、基肥量を１割程度増肥する。

穂肥診断基準（出穂 20 日前）

草丈	葉色板	穂肥Ⅰ施用量
75cm未満	4.5 未満	基　準　量
	4.5 以上	基準の半量
	5.0 以上	施用しない
75～85cm	4.0 未満	基　準　量
	4.0 以上	基準の半量
	4.5 以上	施用しない
85cm 以上		施用しない

※穂肥量は天候や地力に応じて加減する。

※水田では、肥料成分溶出後の被膜殻が浮上することがありますので、被覆殻をほ場外へ流出させないように注意して下さい。

「おいでまい」の特徴と栽培上の留意点

○地力の低下は、収量や品質の低下を招くので、稲わら・麦わらは焼却せずにすき込み、併せて土壌改良資材を施用しましょう。

○分げつが旺盛なため、植付本数が多いと過繁茂となるので、１株当たりの植付本数は3～4本にしましょう。

○生育初期は葉色がうすめに推移するので、過度の施肥はしないようにしましょう。

○強い田干し（干しすぎ）は、根を傷めて収量・品質を落とすので、適切な水管理を行いましょう。

○いもち病に弱いので、育苗箱防除、本田防除は必ず実施し、発生が見られたら確認防除を行いましょう。

病害虫防除基準

【必須防除】苗箱防除

防除時期	対象病害虫	農薬名	使用基準	注意事項
田植当日	いもち病、紋枯病、イネミズゾウムシ、ウンカ類、コブノメイガ	ビルダーフェルテラチェスGT粒剤	50g/箱 1回	○老化苗、軟弱徒長苗、露のある場合には薬害の恐れがあるので注意する。 ○本田には直接散布しない。 ○箱箱防除は、本田防除との体系処理で使用する。

【必須防除】本田防除

防除時期			対象病害虫	農薬名	使用基準	注意事項
1回目	いずれか	出穂20～15日前	いもち病、紋枯病、稲こうじ病、ウンカ類、カメムシ類、ツマグロヨコバイ	ゴウケツモンスター粒剤	3kg/10a 収穫45日前までに1回	○水深3cm程度まで水をためて均一に散布し、散布後7日間は落水、かけ流しを行わない。
		出穂直前	いもち病、紋枯病、カメムシ類、ウンカ類、ツマグロヨコバイ	ダブルカットパリダフロアブル	1,000倍 穂揃期まで2回以内	○殺菌剤・殺虫剤の混合で使用。 ○株元、葉鞘部に対して散布むらがないよう全体に均一に散布する。
				スタークル顆粒水溶剤	2,000倍 収穫7日前まで3回以内	
			いもち病、紋枯病、もみ枯細菌病、ウンカ類、ツマグロヨコバイ、カメムシ類	ダブルカットパリダトレボン粉剤3DL	3～4kg/10a 穂揃期まで2回以内	○粉剤は株全体に均一にかかるように、ていねいに散布する。 ○粉剤は周辺の作物や環境に配慮し、対象は場外に飛散しないよう風が無い時などに散布する。 ○ミツバチに影響があるので、養蜂がある場合、飛散しないように注意する。
2回目	いずれか	出穂10～20日後	カメムシ類、ウンカ類	スタークル粒剤（粉剤DL）	3kg/10a 収穫7日前まで3回以内	○粒剤を使用する場合は、湛水状態で均一に散布する。 ○スタークルは混合剤を含めて、3回までの使用とする。 ○ミツバチに影響があるので、養蜂がある場合は、飛散しないよう注意する。
				スタークル顆粒水溶剤	2,000倍 収穫7日前まで3回以内	
				スタークル豆つぶ	250g/10a 収穫7日前まで3回以内	

【確認防除】

対象病害虫	農薬名	使用量	使用基準	注意事項
スクミリンゴガイ（ジャンボタニシ）	スクミノン	1～4kg/10a	移植後（収穫60日前まで）2回以内	○湛水状態で散布し、散布後7日間は湛水状態にして、落水・かけ流しを行わない。 ○水田以外には絶対に使用しない。 ○常用が多発する圃場では、田植え当日に使用する。
ニカメイチュウ、イネツトムシ、コブノメイガ、アザミウマ類	バダン粒剤4	3～4kg/10a	収穫30日前まで6回以内	○3cm以上の湛水状態で均一に散布し、散布後7日間は落水・かけ流しを行わない。
ウンカ類、コブノメイガ、カメムシ類	トレボンEW	1,000倍（100ml/水100ℓ）	収穫14日前まで3回以内	○株元、葉鞘に対して散布むらがないよう均一に散布する。
いもち病	ブラシンフロアブル	1,000倍（100ml/水100ℓ）	収穫7日前まで2回以内	○粉剤・フロアブルは株全体に均一にかかるように、ていねいに散布する。 ○粉剤・フロアブルは周辺の作物や環境に十分配慮し、飛散しないよう風が無い時などに散布する。
	ブラシン粉剤DL	3～4kg/10a		
いもち病、紋枯病、ウンカ類、カメムシ類	ワイドパンチ豆つぶ	250g/10a	収穫35日前まで1回以内	○3cm以上の湛水状態で均一に散布し、散布後7日間は落水・かけ流しは行わない。
紋枯病	リンバー粒剤	3～4kg/10a	収穫30日前まで2回以内	○粉剤は株全体に均一にかかるように、ていねいに散布する。 ○出穂後まん延の兆しがみえ、散布の必要を認めた場合はバリダシンを遅くとも出穂10日後までに散布する。
	バリダシン液剤5	1,000倍（100ml/水100ℓ）	収穫14日前まで5回以内	
	バリダシン粉剤DL	3～4kg/10a		

雑草防除基準

区分	使用時期	対象雑草名	除草剤名	使用量・回数	注意事項
初期除草剤（一つを選択）	移植直後～9日	水田一年生雑草、マツバイ、ホタルイ、ウリカワ、ミズガヤツリ、ヒルムシロ、クログワイ、セリ	ジェイソウルフロアブル	500ml/10a 1回 移植後30日までに使用	○散布後3～4日は水深3～5cmを保ち、1週間は落水やかけ流しをしない。 ○藻や浮草が発生している水田では、拡散効果が低下し、薬害や効果不良の恐れがあるので使用しない。 ※1 ※3
			カチポシL ジャンボ	小包装（パック）10個（300g）/10a 移植後30日までに使用	○散布直前から3～4日間は水深5～6cmの湛水を保つ。 ○湛水して雑草から小包装の末端1Oaあたり10個の割合で均等に投げ入れる。 ○藻や浮草が発生している水田では、拡散が不十分となり、薬害の発生や効果が劣る可能性があるので使用しない。 ※1 ※2 ※3
			ラオウ 1キロ粒剤	1kg/10a 1回 移植後30日までに使用	○藻類が繁茂した後の散布では効果が劣りますので、発生始めまでに散布する。 ○散布後3～4日間は水深3～5cmの湛水を保つ。 ○田植同時散布機で施用又は湛水して手まきもしくは散粒機等で均一に散布する。 ○異常高温又は異常低温時は薬害発生の恐れがあるため、使用しない。 ※1 ※3
中期除草剤	移植後7日以降	ノビエ、アゼガヤ、キシュウスズメノヒエ	クリンチャー 1キロ粒剤	1kg/10a 2回以内 収穫30日前までに使用	○広葉雑草の多発田では使用を避ける。 ○散布後3～4日間は湛水状態（3～5cm）を保つ。 ○ノビエ3葉期までの使用とする。
	移植後20日以降		クリンチャー EW	100ml/10a 2回以内 収穫30日前までに使用	○使用の際は、展着剤を加用する。 ○湛水または落水状態で、25～100ℓの水に溶き、噴霧器で散布する。 ○ノビエ5葉期までの使用とする。
	移植後20日以降	ノビエ、キシュウスズメノヒエ、ホタルイ、クリガワ、広葉一年生雑草	クリンチャー バスME液剤	1,000ml/10a 2回以内 収穫50日前までに使用	○落水又は浅く湛水した状態で、70～100ℓの水に溶き、噴霧器等で散布する。 ○落水状態で散布し、3日間はそれ以上の落水・入水等はしない。落水ができない場合は浅水状態で散布し、5日間は落水・入水等はしない。 ○ノビエ4葉期までの使用とする。
	移植後20～30日	広葉一年生雑草、ホタルイ、クリガワ、オモダカ	バサグラン粒剤	3～4kg/10a 1回 収穫60日前までに使用	○落水又はごく浅く湛水して手まき又は散粒機等で均一に散布する。 ○落水直後処理とし、散布後3日間は入水はしない。
	移植後20日以降	一年生雑草、オモダカ、ホタルイ、クリガワ、藻類による表層はく離	ツイゲキ豆つぶ250	250g/10a 1回 収穫60日前までに使用	○水深5～6cmの湛水状態で散布し、散布後3～4日間は水深3～5cmを保つ。 ○異常高温時は薬害の発生の恐れがあるため、使用を避ける。 ○ノビエ4葉期までの使用とする。 ※3
	移植後20日以降	水田一年生雑草 マツバイ、ホタルイ、オモダカ	セカンドショットS ジャンボMX	小包装（パック）20個（500g）/10a 1回 収穫45日前までに使用	○散布直前から3～4日間は水深5～6cmの湛水を保つ。 ○湛水して雑草から小包装の末端1Oaあたり20個の割合で均等に投げ入れる。 ○藻や浮草が発生している水田では、拡散が不十分となり、薬害の発生や効果が劣る可能性があるので使用しない。 ○ノビエ3葉期までの使用とする。 ※2
	発生時	ウキクサ類、藻類	モゲトン粒剤	2～3kg/10a 3回以内 収穫45日前までに使用	○散布は雑草が水没する程度の湛水状態で行い、散布後3～4日間は水の移動（入水・落水等）をしない。

※1　砂地で薬害がでやすい地域やスクミリンゴガイが多発しているため湛水できない圃場では、田植後5日以降に除草剤を使用する。
※2　ジャンボ剤のパックのフィルムは水溶性なので濡れた手で作業したり、降雨で破裂することのないように注意する。
※3　砂質土壌、漏水田、軟弱苗、極端な浅植、浮き苗が多い、植穴の戻りの悪い水田は使用を避ける。

農薬使用の際は、容器に記載された「農薬使用基準」を遵守しましょう。
農薬散布の際は、周辺ほ場や作物へ飛散しないよう注意を払いましょう。

近年農作業中の事故・トラブル等が多発していますので、
安全面・周囲の環境に配慮した農作業を心掛けましょう。

2024年 11 月作成